

整然とした札幌の街を夢見た

開拓判官 島 義勇

札幌の開拓の歴史は、ある時期までそのまま中央区の歴史であるといえます。その歴史の原点、札幌開拓の基礎を築いた島義勇を紹介します。

島義勇は文政五年（一八二二年）年生まれの肥前藩（現佐賀県）藩士で、明治二年（一八六九年）七月に開拓使が設置されると開拓判官の一人に任命されました。十月、錢函に到着した判官は、仮役所を設置して札幌本府（北海道の首府）の場所の選定を始めました。十一月十日（新曆十二月十二日）には札幌に向いてコタンベツの丘（円山）に登り、今の南一条通と大友堀（現在の創成川）を本府の南北東西の基線に決め、建設に着手しました。

判官の構想は、『今の道庁付近に三百間（約五百五十坪）四方の本府庁舎を建て、庁舎前の道路の両側に役所・官舎など置いて官地とする。南一条通の北に大通を設けて土手を築き、大通以南の民地と区分する。周辺には琴似・発寒など既存の村を配し、豊

平開墾も行って移民を募集する」というもので、「五州第一の都」島判官の漢詩の一節）を理想とした雄大な構想でした。

十二月、判官は札幌に移ってきました。しかし、本府経営には多大な費用が必要で、判官に経費の追加を求められた東久世通禧開拓使長官は、「判官の独断専行で財政窮乏をもたらしたので、財政を補てんするか判官を処置してほしい」と政府に報告し、判官は三年の二月十一日（新曆三月十一日）に志半ばで札幌を去りました。

また、本府建設も一時中止されましたが、やがて雄大な構想が再認識されて四年一月から再び建設が始まり、後任の岩村通俊判官は島判官の構想をもとに札幌の街づくりを進めました。

（平成八年二月号・第二十八回）

・島義勇像は、北海道神宮の神門そばと、札幌市役所1階ロビーに、判官が開拓の基点とした場所（札幌建設の地）は、南一西一の札幌東ビル角にあります。



島 善勇
（北海道立文書館所蔵）